
広瀬和雄先生を送る

上野祥史

本館研究部考古研究系広瀬和雄先生は、2013年3月をもって本館を定年退職されることとなった。先生は、2004年10月に国立歴史民俗博物館に着任され、折しも大学共同利用機関法人として新たなスタートをきった本館を牽引すべく尽力してこられた。広瀬先生のご退職にあたり、先生の略歴と業績をご紹介することにしたい。

広瀬先生は、1947年6月に京都府でお生まれになった。1970年3月に同志社大学商学部を卒業し、1974年1月に大阪府教育委員会文化財保護課に技師として着任された。1991年には、大阪府弥生文化博物館の開館とともに、同館学芸課長に就任されている。その後、1997年4月に奈良女子大学文学部教授に着任され、1999年には奈良女子大学大学院人間文化研究科教授に就任しておられる。長年にわたり埋蔵文化財の調査と保護に従事してこられ、博物館の創設と運営を通じた社会教育の実践に携われ、その豊富な経験を活かして大学教育に専心してこられたのである。2004年10月より国立歴史民俗博物館研究部教授に着任され、2005年4月より総合研究大学院大学教授を併任されたのである。

広瀬先生は、弥生時代及び古墳時代を主な対象として、幅広い視点で日本列島の古代世界を対象に考古学研究を推進してこられた。1970年代から1980年代にかけて、弥生時代の集落論や古墳時代の群集墳論をリードした研究者であり、1998年の考古学研究会総会で報告した「弥生都市論」が学界に大きな衝撃を与えたことは記憶に新しい。また、2003年には『前方後円墳国家』（角川書店）を著し、独自の視点で古墳時代社会を特徴づけ評価しようとする立場を鮮明にされた。その根幹には、「発展史観」「発展段階論的歴史解釈」を懐疑し、既定概念や理論、潜在的な先入観にとらわれることなく、資料より抽出した現象を柔軟に解釈すべきだという主張が貫徹している。また、前後の時代との連続性を前提とする古墳時代社会の評価に批判的で、常に「一つの時代として体系的に評価すること」を強く意識しておられた。それは、学位授与論文である『古墳時代社会の政治構造の研究』（塙書房、2007年）にて、独自の古墳時代社会像の実態として結実している。こうした研究は、20年に及ぶ大阪府地域での豊富な発掘調査経験を基礎として、時代や社会を俯瞰し相対化する透徹した視点に培われたものであり、実証性と論理性を兼ね備えたものとして高い評価を受けている。広瀬先生は、弥生時代研究や古墳時代研究を牽引するオピニオンリーダーとして、常に新しい議論を学界に提起し続けた存在であるといえよう。また、こうした主張ゆえ論客としての印象が強いが、その提起を契機に議論は活性化・深化しており、学界に与えた影響は極めて大きいのである。

本館着任後は、こうした視点を深化させ共同研究をはじめとする研究活動を精力的に展開された。そこには、3つの方向性がある。一つは、「古墳時代は律令期（古代国家）の前史ではない」というテーゼに基づいて、新たな古代史像を確立しようとする取り組みである。自らが主宰する基幹共同研究「古代における生産と権力とイデオロギー」（2005～2007年度）と「新しい古代国家像のため

の基礎的研究」(2009～2011年度)を通じてそれを実践したのである。それらの一部は、シンポジウムやフォーラム、『支配の古代史』(2008年、学生社、共著)などを通じて情報発信されている。これとは別に、本館着任後は新たに、観念領域へのアプローチと東国社会へのアプローチという二つの研究課題に着手されている。霊魂観や他界観などの観念領域に対して、考古学的な現象を文献や民族誌と直結して解釈することに異議を唱え、徹底した現象の解釈に基づいて、通説的な理解とは異なる独自の見解を提示されたのである。それは、亡き首長の霊魂の存在を前提とした、古墳時代前中期における首長権継承儀礼を懐疑するものであり、後期の棺のある石室こそ魂の奥津城として海上他界観を否定するものであった。これらは、『カミ観念と古代国家』(2010年、角川学芸出版)として世に問われた。東国社会に関しては、中央か地方のいずれかの視点に偏る従来の理解を批判し、王権の視点と地域の視点を交錯しつつ、実態に即して地域社会を評価すべきであるという立場を主張した。それは、『畿内の巨大古墳とその時代』(2004年、雄山閣、編著)や『武蔵と相模の古墳』(2007年、雄山閣、編著)、『前方後円墳の終焉』(2010年、雄山閣、編著)などを通じて実践されたのである。

いずれの取り組みも、議論を牽引するオピニオンリーダーとして、全国の研究者を糾合した議論の場を提供するものであり、「大学共同利用」を実践し体現するものであった。また近年は、『考古学の基礎知識』(2007年、角川学芸出版、編著)や『講座日本の考古学』(2011年、青木書店、編著)の企画刊行に携わられた。事典や講座の刊行を積極的に推進し、現状での研究の到達点を集約・総括し、考古学の研究対象に対する情報の体系化や体系的理解の確立に尽力されたのである。

新たな議論を提起し学界を牽引する一方で、歴史研究と現代社会の関係を模索し、諸活動を通じてそれを実践されてきた。文化庁では、長年にわたって文化審議会専門委員を歴任し、遺跡の整備・保存や調査指導にかかる各種委員を担当されている。国内各地で従事された史跡整備及び文化財保護、調査指導は枚挙にいとまがない。本館外では、演会やシンポジウムの企画・参加を精力的にこなし、一般社会に向けた学術研究成果の公開に積極的に取り組まれた。それは、歴史研究と現代社会との関係を直視し、研究と現代社会の接点である史跡や博物館のあり方を思索し、それを実践しようとした取り組みであったといえよう。

総合研究大学院大学では、2004(平成16)年4月より文化科学研究科日本歴史研究専攻教授として、大学院教育に尽力した。主任指導教員や博士論文審査委員の主査として、研究者の指導育成に力を注がれた。指導を受けた学生は多くが社会人学生であり、共同研究や如上の研究活動と関連した教育指導は、実践的かつより効果的な効果を挙げている。なお、2005(平成17)年には専攻長代理を務めるなど、日本歴史専攻の運営並びに大学院教育の充実と発展にも尽力されたのである。

常に新たな研究を開拓してゆかれるその姿は印象的である。本館への着任を契機として、新たに東国の古墳時代研究に取り組まれたこと、あるいは考古学研究においては抽象的になりがちな傾向にある観念領域の研究を精力的に推進され、学界で高い評価を受けていることは周知の如くである。共同研究のみならず広く議論の場を提供しつつも、自身の鋭い感性で独自の境地を切り開いてゆく、まさにオピニオンリーダーの面目躍如である。にこやかな笑顔とは裏腹にその眼光是鋭く、言の葉を尽くして丁寧に議論に応じてくださる先生に、研究者としてあるべき真摯な姿を感じるのは私だけではないだろう。8年半という短い期間ではあったが、広瀬先生が歴博に刻まれた足跡は大きく、歴博の明日を担う我々の道標となっているのである。